

韓国人日本語学習者の助数詞「本」の意味構造 —日本語母語話者との比較を通じて—

金 秀惠

要 旨

本研究では、多義的な意味を持つ助数詞「本」について日本語学習者はどのような意味構造を持つか、さらに日本語学習者と母語話者の間で「本」の意味構造にはどのような違いがあるかを明らかにすることを目的として、韓国人日本語学習者と母語話者をと対象に「本」を使った文の想起と用例の類似性判断による調査を行った。その結果、母語話者と日本語学習者が持つ「本」の意味構造が異なっていることが明らかになった。具体的には、母語話者の方は「細長い」というプロトタイプを中心に具体物を数える用法と抽象物を数える用法に分かれ、まとまったカテゴリー構造を持つのにに対し、日本語学習者の方は形状のみに注目してカテゴリー化する傾向があり、母語話者に比べ、まとまった意味構造を持っていないことが示された。

【キーワード】助数詞、多義語、意味構造、プロトタイプ

1. はじめに

外国語教育において、語彙学習は文法学習に比べ軽視される傾向がある。そのため、学習者は辞書の定義を丸暗記するだけで、語義の一部しか理解していないことが多い。近年、認知言語学的観点からの研究では、外国語学習者の語彙学習において、学習者と母語話者とは持つ語の意味構造が異なっていることが報告されている。そして、多様な用法を持つ語の意味はカテゴリーとして理解させる必要があると指摘されている(今井, 1993)。

日本語には「個」「本」「冊」「枚」のような助数詞が存在し、数える物の種類によって使い分けられている。様々な助数詞の中でも、「本」は使用頻度が高く、幅広い意味で使用されている。助数詞「本」は学習の早い段階で紹介される項目であるが、教科書では単に「細長い物」を数える助数詞であると紹介されることも少なくない。しかし、「本」は電話の回数や論文の数などその形状が細長くないものもあり、何をもって「細長い」とするか明確ではないため、学習者の日本語の助数詞「本」の習得には困難が見受けられる。

韓国語にも日本語と同様に助数詞が存在する¹。「本」に相当する助数詞もいくつかあるが、それら一つ一つの使用は日本語の「本」に比べ、使用される範囲が狭い。「本」に相当する韓国語の助数詞は、

鉛筆には「자루(jaru)」、マッチには「개비(kebi)」、電話には「통(通 tong)」、論文には「편(篇 pyeon)」などが用いられる。

そこで、本研究では、まず日本語学習者が持つ「本」の意味構造はどのようなものか明らかにすることを目的とし、「本」を使った文の想起と用例の類似性判断による調査を行った。さらに日本語母語話者にも日本語学習者と同様の実験を行い、「本」をどのように捉えているかについて調べ、それらを比較した。

2. 先行研究

2.1 助数詞「本」に関する研究

助数詞「本」に関する研究には認知言語学理論に基づいて意味を分析するアプローチと様々な用例を分析するアプローチがある。本節ではそれらの研究によって明らかになったことについて述べる。

2.1.1 認知言語学的観点からの研究

「本」の意味分析に関する研究は主に認知言語学的観点から行われ記述されている。本稿では Lakoff (1987)、Matsumoto (1993)、濱野 (2006) を取り上げる。Lakoff (1987)、Matsumoto (1993) は「本」の多義的な使用について、「細長い」という中心的な意味から拡張の現象が生じていると主張しているのに対し、濱野 (2006) は意味の拡張には

数える話者の主観性が反映していると主張している。以下でそれぞれの主張を説明する。

まず、Lakoff (1987) は、「放射状カテゴリー (radial category)」の事例として助数詞「本」を挙げている。多数の意味を持つ多義語はそれぞれの意味が無秩序に例記されているように見えるが、実は複数の動機づけによって意味拡張が生じており、一つの語としてまとまった意味構造を持っている。「放射状カテゴリー」とはこのような意味構造を持つカテゴリーのことである。「本」の最も一般的な用法は細長い物 (棒、つえ、鉛筆、ろうそく、木、ロープ、毛など) を数えることであるが、それが中心的な意味となって拡張され、それほど典型的と思われない非中心的な例 (電話、野球など) まで拡大適用されうるとしている。「本」の意味拡張が生じる際の動機づけとして以下の3点を挙げている。

a) イメージ・スキーマ (image schema) の変換:

日常経験から得られた具体的なイメージが抽象化されて一つの概念を形成したものである。例えば「ホームランが出た際のボールが描く軌跡」が「細長いイメージ・スキーマ」を形成し、ホームランを「本」で数えるようになった。

b) メトニミー (metonymy: 換喩) の関与:

ある事物を隣接するより認知しやすいもの、目立つもので表すことである。例えばある機能をその機能を有する事物で表す場合がそれである。「注射を1本打つ」では、注射の主要な機能を果たすもの (針) が長く伸びていることから「注射」も「本」で数えられる。

c) メタファー (metaphor: 隠喩) の関与:

2つの事柄から感じ取られる類似性に基づいて、一方の形式で他方を表現することである。例えば導管メタファーはコミュニケーションを細長い導管にたとえて表すメタファーである。「手紙を1本送る」では手紙の伝達が細長い導管としてたとえられている。

Matsumoto (1993) は、Lakoff (1987) の助数詞「本」についての分析に対し、意味拡張の動機づけをより集約させて「本」の意味カテゴリーを以下のように提示した。「本」のプロトタイプは「際立って一次的なもの (saliently one-dimensional)」であり、これを基に①巻かれているもの (カセットテープ、カメラフィルムなど) や輪状のものへの拡張 (輪ゴム、タイヤなど)、②メタファー的拡張を中

心に容器の形状のメトニミー的拡張 (注射器、缶ジュース、スティックタイプの砂糖など)、③何かを成す際の過程のように経験的に一次元を形成するもの (論文など) や長い軌跡を形成するもの (電話、手紙、ホームランなど) への拡張が起きると述べている。

濱野 (2006) は、Lakoff (1987) と Matsumoto (1993) のような従来の「本」の研究アプローチに対し、Langacker (1987) の認知ドメイン (cognitive domain) の概念を用い、「本」の使用には話者の主体的な視点が関与しているとしている。認知ドメインとは、ある事物が認識される領域 (ドメイン) がどのようなものかということで、濱野はドメインを選択する主体的な「視点」を以下のように3つに分けて提示している。

① 空間を捉える視点: 我々の認知能力や身体を介してその対象物を細長い物として捉えるような接し方

(例: 彼は2本の指/腕を折る。)

② 機能性を反映する視点: ある対象が数えられる際、本来の目的を果たす状況にあるかどうかによって限定する。

(例: 彼は3本のテニスラケットを使う/買う/注文する/手入れする。)

③ 専門性を反映する視点: 職業や趣味などが関与することで一般的な捉え方と異なる

(例: 彼らは3本/匹のマグロをさばく。)

電話を例にすると、電話機を数える時には空間的ドメインで認識されるため「台」を用い、通信手段として数える時には機能的ドメインで認識されるため「本」が用いられる。濱野 (2006) はこのように、助数詞「本」の使用は話者の主体的なドメインの選択によって決定され则认为している。

以上のように従来の「本」の意味分析研究は、主に認知言語学的枠組みに基づいて行われている。しかし、母語話者が持つ「本」の中心的な意味 (プロトタイプ) はどのようなものか、そして、どのような動機づけで意味拡張されるかについてはあまり実証されていない。

2.1.2 「本」の用例からの意味・用法分析の研究

次に、用例を分析するアプローチの研究について述べる。

谷原他 (1990) では、日本語における助数詞のうち「面」「枚」「本」「個」「つ」の5つに対し

て、使用される物の形・大きさ・抽象物などの違いから、その意味的・用法的分析、及びそれを決定している要因について明らかにするため調査を行い、その用法とプロトタイプを記述している。日本語母語話者 425 名を対象に上記の 5 つの助数詞を用いて様々な特性を持つ物（問題は 50 項目）を「1：使うし、自然」「2：使わないが、自然」「3：使わないし、不自然」の 3 つから選択する形式のアンケート調査を行った。その結果のうち、助数詞「本」は、「1：使うし、自然」であるという答えが 90%以上であったものは「大根」「バスの便」「柱」「歯（歯根も含む）」「長芋」の 5 つで、「バスの便」を除き、すべてが細長い具体物であった。このことから谷原他（1990）は助数詞「本」のプロトタイプについて「細長い形を持つ」「小さいものである」と述べている。また、バスの便のように形状の特徴を持たないのに「本」が使用される場合については、Lakoff（1987）が主張する一貫性のある動機づけ（a~c）によって「意味の拡張」が起こったものであると説明している。

飯田（1999）は、これまでの研究は助数詞「本」の用法を「細長い」物を数える性質から拡張されたものとして研究してきたと指摘している。そして、それらの研究では具体的な用法と比喩的用法が同じ意味をベースとして持っている決めつけてしまっていること、また、比喩的な意味と用法を十分に記述していないことを批判している。そして、飯田（1999）は新聞記事や小説やテレビ番組などの様々な実例を基に分析を行い、助数詞「本」の用法を大きく 2 つに分けて記述している（表 1、表 2 参照）。

表 1 の形状を持つ物体（以下、具体物）を数える用法については物体の基本的な形状に応じて「本 1」から「本 3」まで 3 つに分け、これらの用法に共通している概念は最も目立った特徴が「細長さ」であると記述している。形状を持たない事物（以下、抽象物）を数える「本」の用法は「比喩的用例」と称し、表 2 のように「本 a」から「本 g」までの 7 つに分け、これらに共通する概念は「有用な項目を数える」と記述している。「有用な項目」とは目的を持った行為の達成を指す。この概念を基に、乗り物の便、スポーツの得点、通話、契約の成立、くじの当たりなど、達成数を数えるために使用されるとしている。そして、助数詞「本」の比喩的用法別について分析した結果、必ずしも「細長い」という形

状的性質と関連していると考えられないため、具体物を数える助数詞「本」の用法とは別のものとして扱わなければならないと述べている。

表 1. 具体物を数える「本」の用法
(飯田, 1999: 17)




助数詞	数えられる物体	形態	例
本 1	一次元的に細長い物体		鉛筆、紐、指、木、川、道、タワー等
本 2	環状になっている物体		タイヤ、ネックレス、輪ゴム等
本 3	管状になっている物体		ストロー、トンネル、注射器等

表 2. 抽象物を数える「本」の用法
(飯田, 1999: 70)

助数詞	種類	例
本 a	公共交通の運行数・頻度	電車、地下鉄、バス（飛行機）（船）等
本 b	ソフトウェア	パソコンソフト、ゲームソフト、カット集等
本 c	情報項目	記事、原稿、話題、論文、報告等
本 d	作品・活動	演劇、映画、番組、CM、連載、コンサート、スポーツの練習メニュー等
本 e	連絡手段	電話、（葉書・手紙）
本 f	有用な行為（軌跡）	ホームラン、ヒット、シュート、ジャンプ等
本 g	特定の側からの有用な項目	家具、契約、くじの当たり等

李（2009）は、「匹」で数える魚を「本」で数える場合もあることから、助数詞「本」の文脈に対する高い柔軟性や用法の多様性には、話し手の主体的な「視点」が深く関与していると述べている（例：漁師が三本のマグロを解体した）。調査の方法として母語話者のコーパスデータからサンプルを収集し、クラスター分析（主成分分析）を行った。その結果、助数詞「本」をカテゴリー化する変数として先行研究が重視する外的特徴（線、面、奥行き）や自然分類（有生物、抽象物、出来事など）のみを与えるより、数える対象と主体との関わり（握る、振り回せる、人が入れるなど）や生起文脈の関わり（動作主による制御可能性・生物物・利用物、対象の格：が・を・に）などを与えた場合のほうがより妥当な分類が得られたと言う。以下の図 1 は、外的属性に関わる変数に主体との関わりである「視点」や「文脈情報」などの変数を与えた場合の分析の結果を表している。

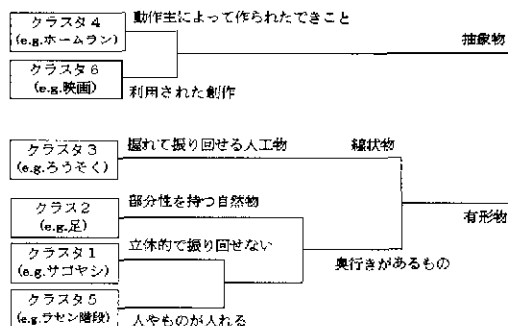


図 1. 助数詞「本」のクラスター分岐のパターン
(李, 2009: 54)

以上が「本」の用例を分析した研究である。谷原他（1990）は、助数詞「本」がどのような特性を持つ物に最も典型的に用いられるかをアンケート調査で明らかにしたものであるが、異なる方法でも調査する必要があると述べている。また、谷原他（1990）、飯田（1999）、李（2009）の研究は主に母語話者を対象に行われ、学習者が「本」についてどのような意味知識を持っているかについては研究されていないことから母語話者と学習者との違いが明らかになっていない。

2.2 母語話者と学習者の意味構造を比較した研究

認知言語学的観点から母語話者と学習者を比較した研究において、母語話者と学習者の意味表象が異なっていることが明らかになっている。

今井（1993）は、多義語である英語の動詞 wear を用いて日米の大学生を対象に 1) wear の様々な用例の類似性判断、2) wear の様々な用例における意味の正誤判断の 2 つの実験を行った。

実験 1 では英語母語話者は wear のカテゴリー構造が意味クラスターの連鎖からなる理路整然とした構造を持つものに対して、日本人被験者は大まかな概念レベル（「着る」「身着にける」）ではアメリカ人被験者とほぼ一致するが、より細かな概念レベルでは両者の間に差が見られ、クラスター内、クラスター間の構造は論理的にまとまりがなかった。

また、実験 2 では英語母語話者の方は用例が適切であるかどうかの判断は意味、用例が慣用的である限り、語の元々の字義通りの意味も比喩的に転用された意味も区別なく受容するが、日本人は日本語の「着る」に関する意味範囲のみを受容していることが明らかになった。

森山（2008）は、日本語格助詞²の意味構造を分析し、それらの妥当性の検証及び習得について記述している。研究された格助詞のうち「に」を例に挙

げると、日本語母語話者 26 人による「に」を用いた 20 文の類似性判断の結果、「に」のカテゴリーは「プロセス性」と「能動性」により①移動先②動作の相手③存在の位置④経験主に分かれた。また「に」のプロトタイプは何であるかを検証するため、日本語母語話者 51 名を対象に格助詞「に」が用いられた例文を作成させる想起実験を行った。その結果、「動作の相手」と「移動先」が想起されやすく、使用頻度では「移動先」が最も多かったことから、格助詞「に」のプロトタイプは「移動先」とであると述べている。しかし、同様の類似性判断課題による実験を韓国人及び中国人日本語学習者に行った結果、学習者の「に」の意味構造は母語話者に比べてカテゴリーの判断基準が曖昧で、カテゴリー内でも用法が拡散しており、まとまりに欠けていることが明らかになった。また、韓国人学習者は「変化の結果」の用法、中国人学習者は「原因」の用法で、母語の影響と思われるカテゴリー化がなされていることが示された。

以上、ある語の用法に対し類似性判断の実験から母語話者と学習者との意味構造が異なっていることを明らかにした研究である。助数詞に関してはこのような母語話者と学習者の意味構造の違いを検証する研究はまだ行われていない。そこで、本研究ではこれらの研究と同様の調査方法を用いて日本語母語話者と韓国人日本語学習者の「本」の意味構造を比較する。

2.3 本研究の目的と研究課題

本研究では学習者の「本」の意味構造を探ることを目的とし、以下の研究課題を設定した。

研究課題 1) 助数詞「本」のプロトタイプは

母語話者と学習者とは違いがあるか。

研究課題 2) 助数詞「本」のカテゴリー構造は

母語話者と学習者とは違いがあるか。

3. 研究方法

3.1 対象者

本調査の対象者は、母語話者は東京の某大学で学んでいる学部生（専攻は問わず）の 33 名である。学習者はソウルの某大学で日語日文学を専攻として学んでいる 3 年生～4 年生の 33 名であり、日本での留学経験や語学研修の経験はない。日本語能力レベルは、旧日本語能力試験 1 級合格者 30 名、2 級合格者 3 名である。

表 3. 類似性判断に使われた文章

分類		例	韓国語訳
具体物	本 1 一次元的に細長い物	鉛筆を 1 本買った。 タバコを 3 本吸った。	-자루 (-) -개 (-)
	本 2 環状になっている物	ストローを 1 本ください。 消防ホース 5 本を新しいものに交換した。	-개 (個) -개 (個), 줄 (-)
	本 3 管状になっている物	彼女は髪を 2 本の輪ゴムで束ねている。 タイヤが 2 本パンクした。	-개 (個) -개 (個)
抽象物	本 a 公共交通の 運行数・頻度	寝坊したので、1 本遅い電車に乗った。 駅へのバスは 1 日 5 本しかない。	-대 (台) -대 (台)
	本 b ソフトウェア	Windows95 は 400 万本も販売された。 ポケモンは発売以来 694 万本売れた超人気ソフトである。	-장 (枚) -장 (枚)
	本 c 情報項目	今年は論文を 3 本も書かないといけない。 今朝の新聞に選挙の関連記事が 30 本以上載った。	-편 (篇) -건 (件)
	本 d 作品・活動	彼は毎週 1 本、映画を見る。 彼女はすでに 20 本の CM に出演した。	-편 (篇) -편 (篇)
	本 e 連絡手段	昨日問い合わせの電話が 10 本あった。 東京に行った息子は手紙 1 本もよこさない。	-통 (通) -통 (通)
	本 f 有用な行為(軌跡)	イ・スヨンが今日の試合でホームランを 2 本放った。 中村は 2 本のシュートを連続で決めた。*中村:サッカー選手	-개 (個), 방 (放) -개 (個)
	本 g 特定の側からの 有用な項目	営業マンが 30 本の契約を取った。 今回宝くじの一等は 3 本出た。	-건 (件) -장 (枚)

3.2 調査方法

母語話者と学習者が持つ助数詞「本」のプロトタイプを明らかにするため実験 1 を、カテゴリー構造を明らかにするため実験 2 を行った。調査は次の実験の結果に影響を与えないよう、まず実験 1 の想起実験を行ってから、実験 2 の類似性判断の順に行った。詳しい方法は以下の通りである。

実験 1) 想起実験

助数詞「本」が用いられている例文を思いつく順に 5 つ書いてもらった。注意事項として「本」が用いられる用例の主語は違う物にするように伝えた。(想起文の例: 鉛筆を 2 本持っている。)

実験 2) 類似性判断(カード分類)

実験 2 で使用した「本」の用例は、意味と用法について最も詳しく分析した飯田 (1999) の分類を参考にし、用法のうち典型的で母語話者と学習者のどちらにも馴染みのあるものを選んで 20 文作成した(表 3 参照、10 分類×2 文=20 文)。実験参加者には 20 の用例文が書いてある 20 枚のカードをセットにして渡し、「本」の意味が似ているものをグループに分けるように指示した。また、グループの数と各々のグループ内のカードの数は自由にしてよいと伝えた。(グループ作成の例: 鉛筆・タバコ・ストロー・消防ホース・輪ゴム・タイヤ/電車・バス/論文・新聞記事/Windows95・ポケモン/…)

3.3 分析手順

実験 1 の想起実験は、想起された文を飯田 (1999) の分類に基づいて分類した後、単純集計を行った。

実験 2 の類似性判断は統計パッケージ SPSS (Ver.18) を用いて、多次元尺度解析とクラスター分析(最長距離法)を行った。多次元尺度解析は、何らかの類似性のデータに基づいて項目間のつながりを多次元空間内の距離の遠近によって示す手法で、複雑な意味構造を客観的な数量的尺度によってとらえやすく表示するという点で、語の意味構造を探るのに適した分析手法である。そして、対象をいくつかのタイプに分類するクラスター分析を併用することで類似度のデータの構造がより一層理解しやすくなる。データの分析を行う前に以下のように非類似性行列を作成する必要がある。

- ①20 文の「本」の用例について意味が似ていると答えた母語話者と学習者の数を各々数え、表 4 のように類似性行列を作成する。
- ②非類似性行列を求めるため、全員である 33 名から①の類似性データを引く(数値が 0 に近いほど類似し、33 に近いほど類似していないことを示す)。
- ③SPSS で多次元尺度解釈とクラスター分析を行う。

表 4. 母語話者のカード分類結果

①類似性行列の一部の例

	鉛筆	タバコ	ストロー	ホース	輪ゴム	タイヤ	電車	バス	...
鉛筆									
タバコ	33								
ストロー	33	33							
ホース	27	29	26						
輪ゴム	23	23	23	28					
タイヤ	21	21	21	28	31				
電車	4	4	4	4	5	5			
バス	5	5	5	4	5	6	32		
...									

②非類似性行列の一部の例

	鉛筆	タバコ	ストロ	ホース	輪ゴム	タイヤ	電車	バス	...
鉛筆									
タバコ	0								
ストロ	0	0							
ホース	6	4	7						
輪ゴム	10	10	10	5					
タイヤ	12	12	12	5	2				
電車	29	29	29	29	28	28			
バス	28	28	28	29	28	27	1		
...									

(表中では文字制限のため「ストロ」と表記)

4. 分析結果と考察

4.1 研究課題1：助数詞「本」のプロトタイプは母語話者と学習者では違いがあるか。

想起実験の結果は以下の通りである。(表5、図2参照)。想起された文の総数は、母語話者は165文(33名×5文)で実験参加者の全員が正しく書けたが、学習者は123文で、助数詞「本」を用いた例文が5つ書けた学生は33名のうち10名しかいなかった。なお、学習者が書いた例文の総数は134文であったが、「本」の用法の間違い(「本」で数えられない物)や数える対象物が重複して用いられた文、合計11文を分析対象から除外した。

想起された文の対象物の種類は、母語話者は具

体物47種類と抽象物11種類で計58種類、学習者は具体物32種類と抽象物4種類で計36種類であった。

最初(No.1)の文で一番多く想起された事物は、母語話者・学習者共に鉛筆であり(母語話者18文、学習者8文)、全体的に最も多く想起された物も鉛筆であった(母語話者26文、学習者21文)。

まず、母語話者に想起された文は、鉛筆のように一次元的に細長い具体物が用いられた例文の数が最も多く、全体の7割以上(119/165文)を占めた。具体物を数える用法で想起された事物を詳しく見ると、「本1」の一次元的に細長い物を数える用法では、ペン類が34文(鉛筆26回・ペン4回・シャーペン3回・ボールペン1回)で、その次は植物・花類が13文(木8回・枝4回・バラ1回)、指を使ったものが9文であった。それ以外には、柱、箸、髪の毛、紐、歯、きゅうり、ろうそくなど全部で43種類の物が想起された。「本2」の環状になっている物体を数える用法は想起された例文が1つもなかった。「本3」の管状になっている物体を数える用法では、9つの文のうちペットボトルを用いた文が6文想起され、それ以外はストロー、ズボンなどであった。

表5. 「本」の想起実験結果

		<母語話者>						<学習者>					
分類	No	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	合計	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	合計
		.1	.2	.3	.4	.5		.1	.2	.3	.4	.5	
具体物	「本1」一次元的に細長い物	27	20	23	23	26	119	22	23	18	17	8	88
	「本2」環状になっている物						0						0
	「本3」管状になっている物		2	1	4	2	9	9	5	3	6	3	26
	計	27	22	24	27	28	128	31	28	21	23	11	114
抽象物	「本a」交通の運行数・便		1	1			2			1			1
	「本b」ソフトウェア		1				1						0
	「本c」情報項目	2		4			6						0
	「本d」作品・活動	4	6	2	2	2	16		3	1			4
	「本e」連絡手段						0						0
	「本f」有用な軌跡			1	3	2	6					2	2
	「本g」特定の側からのみの有用な項目						0						0
	計	6	8	8	5	4	31		3	2		2	7
その他			3	1	1	1	6			1	1		2
合計		33	33	33	33	33	165	31	31	24	24	13	123

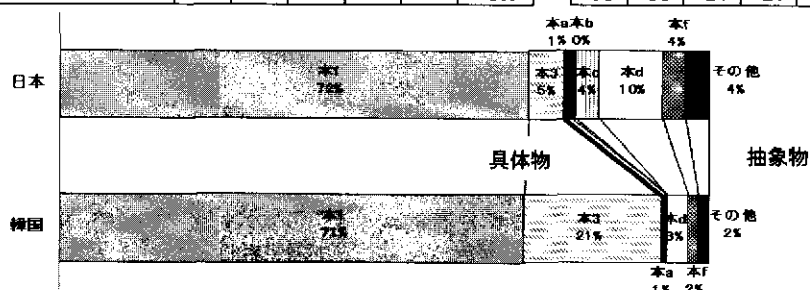


図2. 母語話者と学習者が想起した用法の内訳

抽象物を数える比喩的用法では、「本 a」の交通の運行数・便を数える用法で 2 つの文が想起され、「電車が 1 本遅れた」という文であった。「本 b」のソフトウェアを数える用法では 1 つの文が想起され、「ゲームソフトを 5 本持っている」という文であった。「本 c」の情報項目を数える用法では、6 つの文が想起され挙げられた用例はすべて「論文」であった。「本 d」の作品・活動を数える用法では 16 文が想起され、抽象物を数える用法の中で最も多かった。16 文のうち映画を用いた文が 12 文想起され、それ以外にはビデオ、DVD、劇などがあつた。「本 e」の連絡手段に属する例文は想起されなかった。そして「本 f」の有用な軌跡を数える用法では、ホームラン、ノック、シュート、サードなどの例文であった。「本 g」の特定の側からの有用な項目に属する例文は 1 つも想起されなかった。最後にその他に分類されたのは、飯田 (1999) で「本」の比喩的慣用表現として分類されている「一本勝負」「一本取られた」「〜本立て」を含んだ表現であった。

次に、学習者が想起した文は、表 5 に示したように具体物を数える用法が 9 割以上であった (114 / 123 文)。具体物を数える用法で想起された文は「本 1」一次元的に細長い物体を数える用法が 88 文であり、母語話者と同様にペン類が最も多い 37 文 (鉛筆 21 回・ボールペン 10 回・ペン 6 回) であった。そして、傘 12 回、タバコ 7 回、木 5 回で、それ以外はマッチ、箸、柱、棒など 22 種類の物が想起された。次に「本 2」の環状になっている物体を数える用法では母語話者と同様に想起された例文が 1 つもなかった。「本 3」の管状になっている物体は 25 文が想起され、対象物はビールが 13 文で、それ以外はワイン、お酒、(缶) ジュースなどであった。

抽象物を数える比喩的用法では全部で 7 文しか想起されず、全体の例文の 1 割にも満たなかった。「本 a」の交通の運行数・便を数える用法では「電車が 1 本遅れた」という文が 1 つ、「本 d」の作品・活動を数える用法では映画を用いた文が 3 つ、ドラマを用いた文が 1 つ、全部で 4 文であった。「本 f」有用な軌跡を数える用法では、ホームランが用いられた例文が 2 つであった。そしてその他、比喩的慣用表現が 2 文であった。

図 2 は想起された用法の内訳を表したものである。両者ともに鉛筆のように「本 1」一次元的に細長い物体が最も多く想起された点が共通しているこ

とから、母語話者と学習者が持つ助数詞「本」の代表的イメージ、つまりプロトタイプは「形状が細長い物」であると考えられる。しかし、プロトタイプは共通するものの、学習者は抽象物をほとんど想起しておらず、その数や種類も非常に少ないことから、母語話者と比べ意味拡張の範囲が狭く具体物にとどまっていることがうかがえる。

4.2 研究課題 2：助数詞「本」のカテゴリー構造は母語話者と学習者では違いがあるか。

研究課題 2 では、母語話者と学習者に類似性判断をしてもらい、多次元尺度解釈を行った。その結果、4 次元解で母語話者は $Stress = 0.125$ 、 $RSQ = 0.912$ 、学習者は $Stress = 0.122$ 、 $RSQ = 0.892$ 、3 次元解で母語話者は $Stress = 0.191$ 、 $RSQ = 0.839$ 、学習者は $Stress = 0.181$ 、 $RSQ = 0.815$ 、2 次元解で母語話者は $Stress = 0.315$ 、 $RSQ = 0.667$ 、学習者は $Stress = 0.273$ 、 $RSQ = 0.720$ であった。多次元尺度では $Stress$ 値が 0 に近いほど適合度がよく、 RSQ が 1 に近いほどあてはまりがよいと解釈される。3、4 次元ではある程度よい適合度を示しているが読みとりにくいので、2 次元解の空間を図示すると各々図 3、図 4 のようになる。クラスター分析を行った結果は図 5、図 6 のようになった。

両者の大まかな空間配置は図 3、図 4 で表したように大きく 2 つのクラスターに分けられる。母語話者は鉛筆、ストロー、輪ゴムなどのような具体物とそれ以外抽象物のクラスターに分けられ、同一クラスター内の項目の距離が近くにまとまっている。しかし、学習者は母語話者のような具体物と抽象物の区別は見られず、母語話者に比べクラスターの間が接近していて、まとまりがなく明確に分かれていない。

母語話者は具体物について、鉛筆、タバコのように一次元的に細長い物から輪ゴム、タイヤのように環状になっている物まで「形状が細長い」という概念を中心に 1 つのクラスターを成していると考えられる。抽象物については、ホームランとシュートのような打球の軌跡、電車とバスの運行を数える用法が同じクラスターに属していることから、これらには「軌跡など抽象的な形が細長い」という概念を中心にカテゴリーを成していると考えられる。そして、Windows95、ポケモンのようなソフトウェア、映画、CM、電話と規約、論文や記事などが同じクラスターに属していることから、これらには「何か

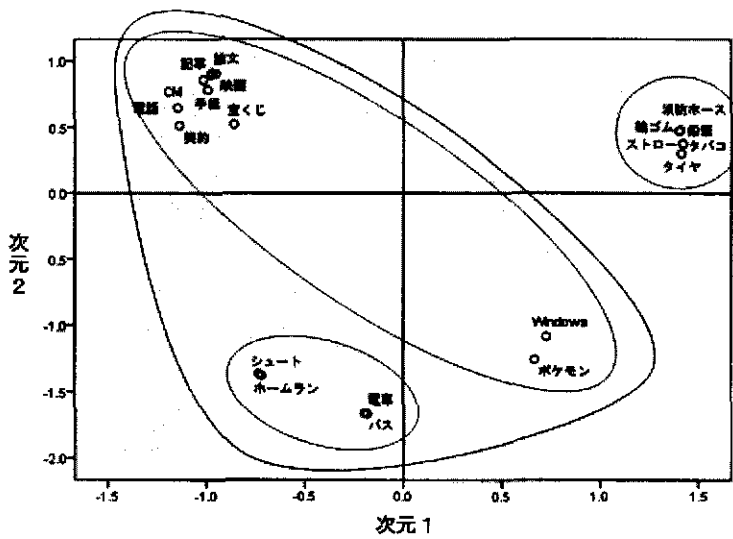


図 3. 母語話者の「本」の多次元尺度解釈の結果

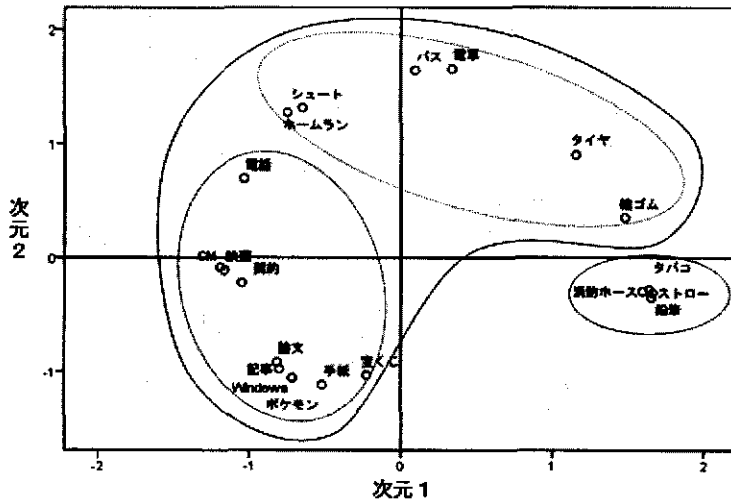


図 4. 学習者の「本」の多次元尺度解釈の結果

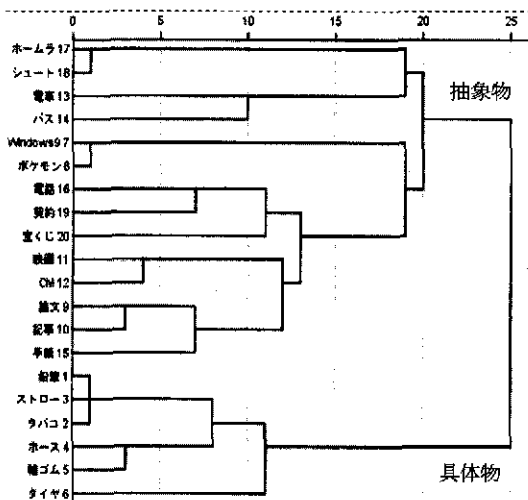


図 5. 母語話者の「本」のクラスター分析の結果

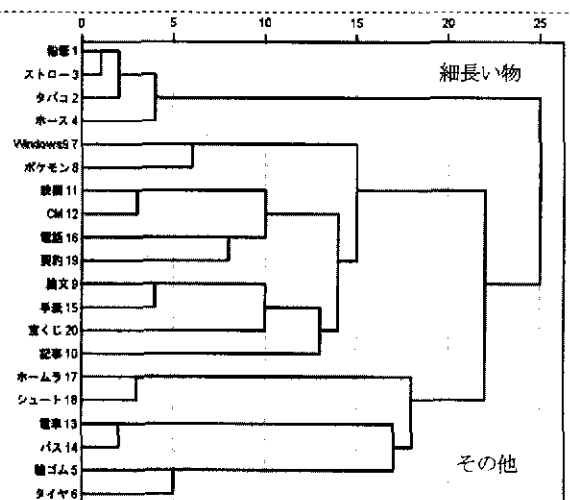


図 6. 学習者の「本」のクラスター分析の結果

を成す際の過程のように経験的な一次元を形成するもの」という概念を中心にカテゴリーを成していると考えられる。

一方、学習者は具体物について、鉛筆、タバコ、ストロー、消防ホースのみ「細長い物」とであると判断し同一のクラスターに含めている。輪ゴム、タイヤのように環状になっている物に関しては、図4ではまとまりを見せていないが、図6のクラスター分析から「環状になっている物」という別のカテゴリーを成していると考えられる。次に抽象物に対する概念については、「ソフトウェア」「作品・活動」など細かい部分は母語話者と似ているところもあったが、全般的にどのような基準でカテゴリーを形成しているかは本調査では明らかにならなかった。

以上、クラスター分析の結果から、母語話者と学習者が持つ助数詞「本」のカテゴリー構造は、形状が一次的に細長く見える物に対しては相違がないが、形状が細長くない物や抽象物についてはかなり異なっていることが明らかになった。

4.3 全体的考察

本研究は日本語学習者の助数詞「本」の意味構造について、母語話者のそれと比較したものである。その結果、両者の意味構造は異なることが明らかになった。

まず想起実験の結果では、学習者は母語話者に比べ「本」を用いた文の数が少なく、想起された物のほとんどは主に鉛筆、ビール、傘、木などのように固くて一次的に細長く見える物であった。そして鉛筆やボールペンなどのペン類の次にビールやワインのように瓶の形に関わる物が多く想起されるという特徴が見られた。

類似性判断の結果からは、母語話者と学習者が持つ助数詞「本」のカテゴリー構造は異なっていることが明らかになった。母語話者は「細長い」というプロトタイプを中心にまとめたカテゴリー構造を持つのにに対し、学習者は「一次的に細長い」という中心的なカテゴリーは母語話者と一致しているものの、形状が細くない物を数える用法や比喩的に拡張した用法は構造化が進んでおらず、動機付けも明確ではなかった。

このような差異は今井（1993）でも指摘されている。今井は、学習者は言葉が持つ意味を語の字義どおりの用法のみ理解する傾向があるため、プロトタイプにとどまってしまう、カテゴリー全体の意味

の理解ができていないと述べている。本研究でも助数詞「本」に関して、母語話者の場合は形が細長いものから抽象的なものへと意味カテゴリーが広がっているが、学習者の場合は形状が細長い物にとどまり、そうでないものへの意味拡張はあまり起きていないことが示され、今井（1993）を支持する結果となった。

最後にこの違いが生じた原因について簡単に考察してみたい。

まず、母語の転移の可能性が考えられる。韓国語の助数詞には、「本」のように広範囲に使用される語はない。同じように「細長い物」であっても韓国語では鉛筆（자루 *jaru*）、タバコ（개비 *kebi*）、ストロー（개 *ke*）、消防ホース（줄 *jul*）を別々の助数詞を用いるが、一つのカテゴリーに分類していたことから、学習者の「本」についての意味知識は母語とは異なり「細長い物全体を数えるもの」だと正しく認識しており、母語の影響は見受けられなかった。しかしながら、それ以外の抽象物に対しては知識をほとんど持たないため、それらへの意味拡張がなされなかったと考えられる。

また、彼らが用いた教材の影響も考えられる。韓国で用いられる教材では、助数詞「本」で数えるものの例として鉛筆と瓶などがよく挙げられる。そのためこのような現象が生じた理由として韓国での「本」の教育も関わっている可能性がある。

北川（2005）は、初級学習者の語彙や文型の制限により指導しにくい抽象度の高い語を教えるにあたって、日本語教育における助数詞の扱いの問題点を指摘している。母語話者の実際の使用状況と教科書の用法とではどのように異なるかということを、日本語学校で使われている5冊の初級の日本語教科書とドラマの脚本を比較検討した。その結果、どの教科書でもかなり早い課で助数詞が取り上げられていたが、単に外観が細長い物を数える用法のみが扱われ、テープやカセットといった物が含まれていたのは1冊だけだった。一方、ドラマの脚本では電話、シナリオ、講義などといった身近な語が用いられていたと述べている。

母語話者との違いを生み出した原因については、上で述べたような母語やインプットの頻度といった要因の影響が考えられる。今後、これらの要因が学習者の意味構造にどのような影響を及ぼすのかさらに研究を進める必要があるだろう。

5. 今後の課題

本研究では、類似性判断の調査を飯田（1999）の分類を基に行ったが、実験を行うとき使用した「本」の用例は20例とかなり限られた数であったため、それが結果に影響している可能性も否定できない。今後、より多くの用例を用いて調査を進める必要があると考えられる。また、学習者が持つ「本」の意味の範囲は母語話者に比べて狭いものであったが、それがプロトタイプの影響を受け、拡張に制約が起きたためか、それとも母語が影響しているためか、これらの点についてもさらに研究を行っていきたい。

注

1. 韓国での助数詞は、「名数詞」または「単位性依存名詞」「単位名詞」とも言われ数や分量等を表す。
2. 森山（2008）では、格助詞の「が」「を」「に」「で」「へ」「から」「まで」について研究を行い、類似する格助詞の意味構造の違いについても記述している。

参考文献

- 飯田朝子（1999）『日本語主要助数詞の意味と用法』東京大学大学院人文社会系研究科博士論文
飯田朝子（2004）『数え方の辞典』小学館
飯田朝子（2009）「現代日本語の助数詞-ものの捉え方で決まる数え方-」『日本語学』28, 32-41.
李在鎬（2009）「多変量解析による助数詞の分析-話し手

- の視点を反映する助数詞-」『日本語学』28, 44-57.
今井むつみ（1993）「外国語学習者の語彙学習における問題点-言葉の意味表象の見地から-」『教育心理学研究』41, 243-253.
北川幸子（2005）「日本語教育における助数詞の扱いの問題点-助数詞「本」を例に-」『日本語教育方法研究会誌』12(1), 54-55.
西光義弘・水口志乃扶(編著)（2004）『類別詞の対照』くろしお出版
谷原公男・顔瑞珍・Lee Debbie（1990）「助数詞の用法とプロトタイプ <面>・<枚>・<本>・<個>・<つ>」『計量国語学』17(5), 209-226.
濱野寛子（2006）「助数詞「本」の多義性に関する認知言語学的考察」『言語科学論集』(12), 77-93.
濱野寛子・李在鎬（2006）「多変量解析に基づく助数詞「本」のカテゴリー化」『日本認知言語学会論文集』6, 553-556.
森山新（2008）『認知言語から見た日本語格助詞の意味構造と習得-日本語教育に生かすために-』（シリーズ言語学と言語教育 第16巻）ひつじ書房
Lakoff, George. (1987). *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上肇作 他訳) 1993『認知意味論』紀伊国屋書店
Matsumoto, Yo. (1993). Japanese numeral classifiers: a study of semantic categories and lexical organization. *Linguistics*, 31, 667-713.

きむ すへ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
dazzlesh@hotmail.com

Meanings of Hon-classifiers for Korean learners of Japanese language

- A comparison with native Japanese speakers -

KIM Suhye

Abstract

This research aims to explore different meanings of the classifier 'Hon' conceived by Japanese learners. Moreover, it also aims to find the difference in conception of the classifier 'Hon' between Korean Japanese-learners and native Japanese and conducted an analytical investigation accordingly. As a result, it was known that there is a difference in their usage of the classifier 'Hon.' Specifically, native Japanese speakers have a prototype of the classifier centered around the image of 'long and thin' objects and can use it categorically, for example, in counting objects physically and abstractively. But in the case of Japanese-learners, they have the tendency of categorizing the classifier only in terms of physicality, and do not possess a holistic range of meanings compared to the natives.

【Keywords】 classifiers/counters, polysemy, semantic structures, prototype

(Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University)